

平城京左京三条一坊一・二坪の発掘調査（平城第 495 次調査）記者発表資料

2012 年 9 月 13 日

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査地：奈良市二条大路南 3 丁目

調査主体：奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査面積：1845㎡（北調査区：東西 33 m、南北 21 m、693㎡、
南調査区：東西 48 m、南北 24 m、1152㎡）

調査期間：2012 年 7 月 2 日～2012 年 9 月（継続中）

※現地説明会のお知らせ

2012 年 9 月 15 日（土） 13：30～ 小雨決行

1. 概要

今回の調査では、南北 2 か所の調査区を設定した。北調査区では鉄鍛冶工房を検出し、左京三条一坊一坪の鉄鍛冶工房の全容がほぼ明らかとなった。南調査区では三条条間北小路とその南北両側溝を検出し、一坪と二坪の境界部分の様相が判明した。

2. 平城京左京三条一坊一・二坪に関するこれまでの調査

今回の調査地である平城京左京三条一坊は、平城宮の正門である朱雀門の南東に位置する区画で（図 1）、発掘調査以前は史跡平城京朱雀大路跡に隣接する緑地公園の一部となっていた。

1986～1996 年におこなわれた奈良市教育委員会や奈良国立文化財研究所（当時）の発掘調査により、左京三条一坊一坪は、朱雀大路に面する西辺と二条大路に面する北辺に築地塀などの遮蔽施設をもたない、広場のような空間であった可能性が高いとされていた。また、これらの調査では、一坪とその南に位置する二坪を区切る三条条間北小路と南北の

側溝が確認されており、二坪には西辺・北辺ともに築地塀が存在したとされている。現在は、その築地塀の一部が復元されている。

この場所には国土交通省によって平城宮跡展示館（仮称）の建設が計画されており、2010年から継続的に奈良文化財研究所が発掘調査をおこなってきたところである（平城第478・486・488・491次調査）。本調査もその一環である。

敷地の東辺を南北に細長く調査した第478次調査では、調査区の東北部で上段が正方形、下段が六角形の井戸枠をもつ大型の井戸を検出した。また、調査区の南端部では三条条間北小路とその南北両側溝を確認した。敷地の北方を調査した第486次調査では、奈良時代前半の大規模な鉄鍛冶工房群の存在が明らかとなった。第486次調査の南方、敷地の中央部を調査した第488次調査では、一坪を南北に区切る坪内道路を再確認し、さらにそれよりも古い建物群を確認した。第488次調査の南方、敷地の中央やや南を調査した第491次調査では、第488次調査で一部検出していた建物の規模が確定し、さらに別の掘立柱建物1棟を検出した。

今回の調査では、南北2か所の調査区を設定した（図2）。北調査区は第486次調査で確認した鉄鍛冶工房が広がる範囲の確認を目的とし、南調査区は一坪・二坪の境界部分の様相を明らかにすることを目的としている。調査面積は北調査区693㎡（東西33m×南北21m）、南調査区1152㎡（東西48m×南北24m）の、合計1845㎡である。調査は7月2日に開始し、現在も継続中である。

3. 主な検出遺構

(1) 北調査区（図3）

検出した主な遺構は、鉄鍛冶工房と掘立柱塀3基、溝1条である。

鉄鍛冶工房 調査区西半で検出した。東西約13m、南北約7mの範囲に23基の鍛冶炉が遺存しており、さらに送風装置である鞴ふいごや、鉄を叩く際の台である金床かなどこを設置するための土坑どこうが付属する。鍛冶炉は基本的に円形や楕円形に地面を掘りくぼめ、内部に砂粒などを含む土を貼り付けた構造である。炉の径は遺存部分で20～30cmほどのものが多く、熱を受けたため中央が赤色化ないし黒色化している。覆屋おおいやが存在していたと考えられるが、現在調査中である。

掘立柱塀1 調査区東方で検出した、南北方向の掘立柱塀。3間分を確認しており、北側にさらに続く可能性もある。柱間寸法は約3mで10尺等間。掘立柱塀1よりも東側には鉄鍛冶工房に関連する遺構はみられないため、今回検出した工房区域の東側を区切る塀であった可能性が高い。



鍛冶炉

掘立柱塀 2 掘立柱塀 1 の西方で検出した、南北方向の掘立柱塀。3 間分を確認しており、北側にさらに続く可能性もある。柱間寸法は約 3 m、10 尺等間で、柱穴の南北位置は掘立柱塀 1 とおおむね揃う。工房覆屋の一部の可能性もある。

掘立柱塀 3 調査区北端の西よりで検出した、東西方向の掘立柱塀。4 間分を確認している。柱間寸法は約 2.7 m で 9 尺等間である。掘立柱塀 3 の周辺に堆積していた土は鍛冶炉周辺のものとは異なり炭を多く含んでおらず、また掘立柱塀 3 よりも南側で鍛冶炉がみられなくなるため、今回検出した工房区域の北側を区切る塀であったと考えられる。

南北溝 1 調査区西壁で確認した、南北方向の素掘溝。溝の埋土は工房に由来する炭混じりの土である。工房区域の排水機能を担っていた可能性もある。南北溝 1 よりも東側で鉄鍛冶工房に関連する遺構がみられなくなる。また、第 486 次調査で検出していた斜行溝と東西溝の合流点に接続する。これらのことから今回検出した工房区域の西側を区切る溝であった可能性が高いと考えられる。

(2) 南調査区 (図 4)

検出した主な遺構は、三条条間北小路とその南北両側溝、建物 1 棟などである。

三条条間北小路および南北側溝 調査区中央で検出した、左京三条一坊一坪と二坪を区切る東西道路。東西約 45 m にわたって確認した。南北両側溝は護岸等のみられない素掘溝で、ともに幅約 1.5 m、深さ 30cm 以上である。ただし、南側溝は調査区西端から約 4 m の範囲では北側に広がり、幅約 2.5 m となる。両側溝の心々間距離は 6.7 m で、現状での路面幅は約 5 m である。特に南側溝の上層埋土および周辺を中心に多くの瓦片が出土している。

建物 1 調査区西方で検出した、桁行 4 間、梁行 2 間の東西棟の掘立柱建物。柱間寸法は桁行・梁行ともに約 3 m の 10 尺等間である。三条条間北小路と重複しているが、東西面中央の柱掘方は北側溝の埋土上から掘られており、北側溝の埋没後に建てられたことがわかる。

4. 主な出土遺物

(1) 北調査区

鉄鍛冶工房に関連する鉄滓・鞆の羽口・鍛造剥片などが出土した。金床に利用されたとみられる石の破片も多く、また、砥石が出土した。そのほか、須恵器片・土師器片・瓦片がある。

(2) 南調査区

須恵器片・土師器片・瓦片が出土した。須恵器片には墨書をもつものが 4 点あり、釈読できた 2 点には「司」「凡」と記されている。須恵器・土師器・瓦ともに奈良時代後半のものが中心である。

5. まとめ

現時点における今回の調査成果は以下の通りである。

(1) 北調査区

第 486 次調査により北方へ続くことが想定されていた鉄鍛冶工房の範囲が確定した。これにより、北調査区の北方に位置する二条大路のすぐ南まで鉄鍛冶工房が広がっていたことが判明した。今回の調査で検出した鉄鍛冶工房は第 486 次調査で検出した奈良時代前半の鉄鍛冶工房と一連の工房群を構成していたと考えられる。工房の範囲は朱雀門のすぐそばにまで及んでおり、大規模なものである点からみても、これらの工房群が都城の造営あるいは改修と関連する可能性がより高まったといえよう。古代の都城とそれを支えた現業部門との関係について、さらに詳細な資料を得ることができたといえる。

また、第 486 次調査と合わせて、奈良時代前半における平城京の鉄鍛冶工房の具体的な様相がより一層明らかになった。奈良時代の鉄鍛冶工房の実態と変遷過程を考察する上で重要な知見を提供したといえる。

今回の調査区では、工房の廃絶後は整地がなされており、奈良時代後半に位置づけられる顕著な遺構はみられない。そのため、これまでも指摘されてきたように、左京三条一坊一坪の少なくとも西半は広場として利用されていたことを追認できた。

(2) 南調査区

三条条間北小路とその南北両側溝の広がりを確認した。奈良市教育委員会が検出した南側溝は両肩が大きく浸食されており、溝本来の規模は不明であったが、今回の調査により南北両側溝ともに幅を確定できた。南側溝は西側で幅を広げることが明らかになるなど、三条条間北小路の側溝の詳細な様相が判明した。

さらに、北側溝の埋没後に建物が建てられていたことが明らかとなった。側溝や道路の廃絶後の土地利用の一端が判明したといえる。ただし、北側溝の埋没時期や南北両側溝の廃絶の前後関係などについては現在も調査を継続中である。

なお、二坪を区切る築地については、^{はんちく}版築などの確実な痕跡は確認できていない。ただし、奈良市教育委員会の調査成果と同様に、築地塀が想定されている位置には空地が広がっていることを確認しており、また足場穴または^{そえばしら}添柱穴の可能性のある穴も検出している。さらに、周辺の出土状況に対して南側溝付近から比較的多くの瓦片が出土している。これらのことから、南調査区の南端部には本来築地塀が存在していたと考えられる。

問い合わせ先：

奈良文化財研究所副所長 深澤芳樹

0742-30-6832

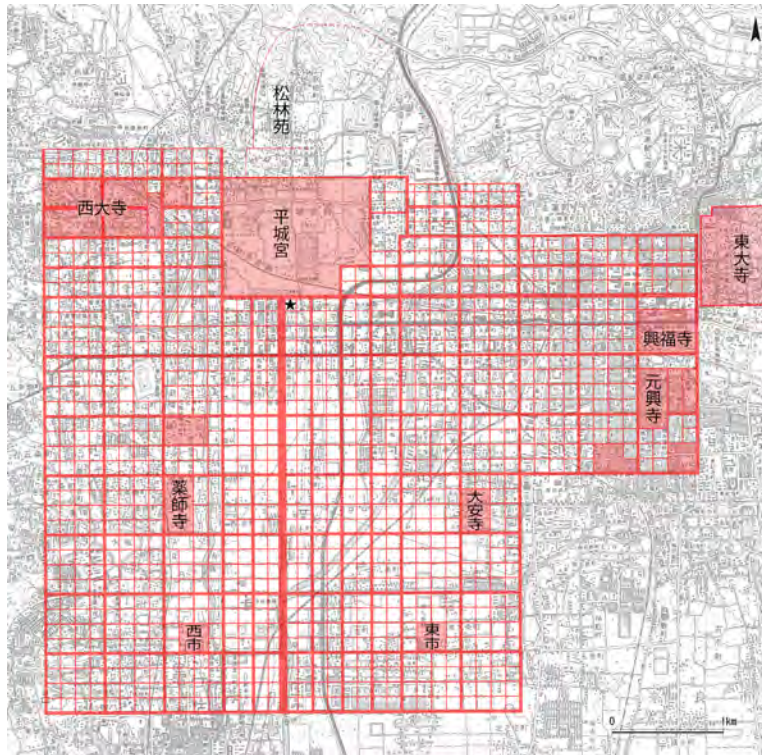


図1 平城京左京三条一坊の位置 (★の位置)

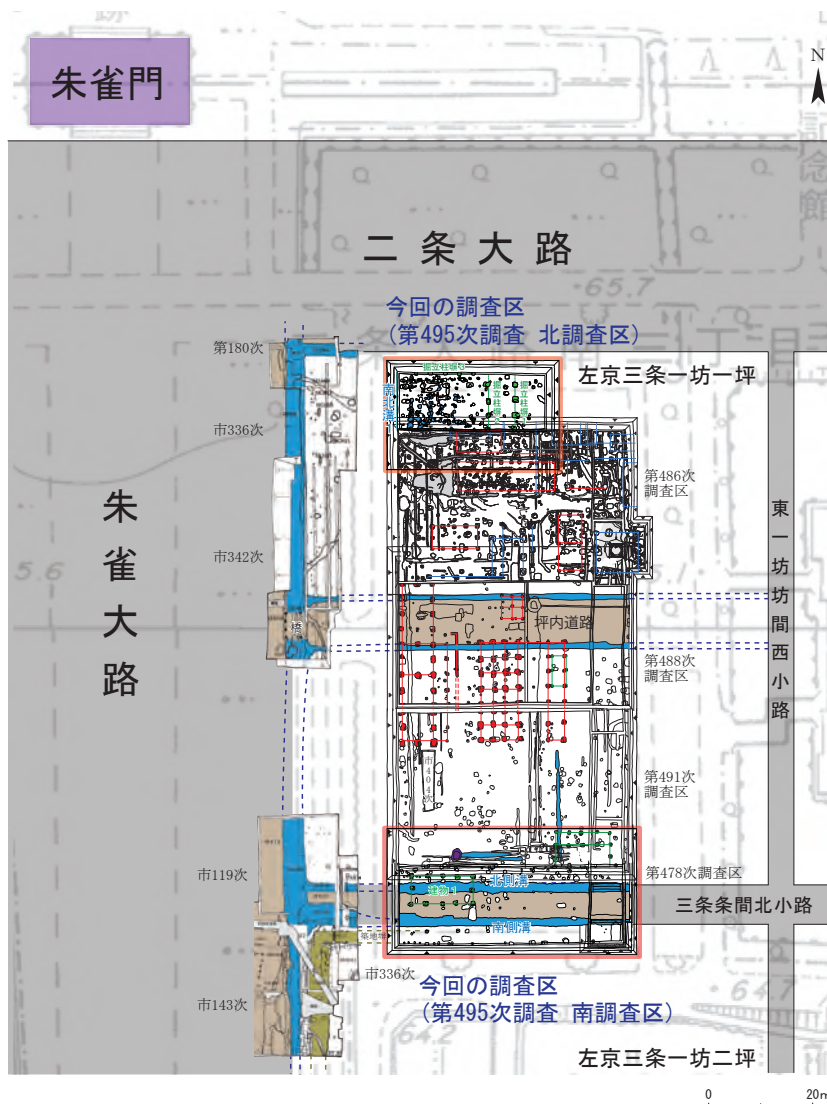
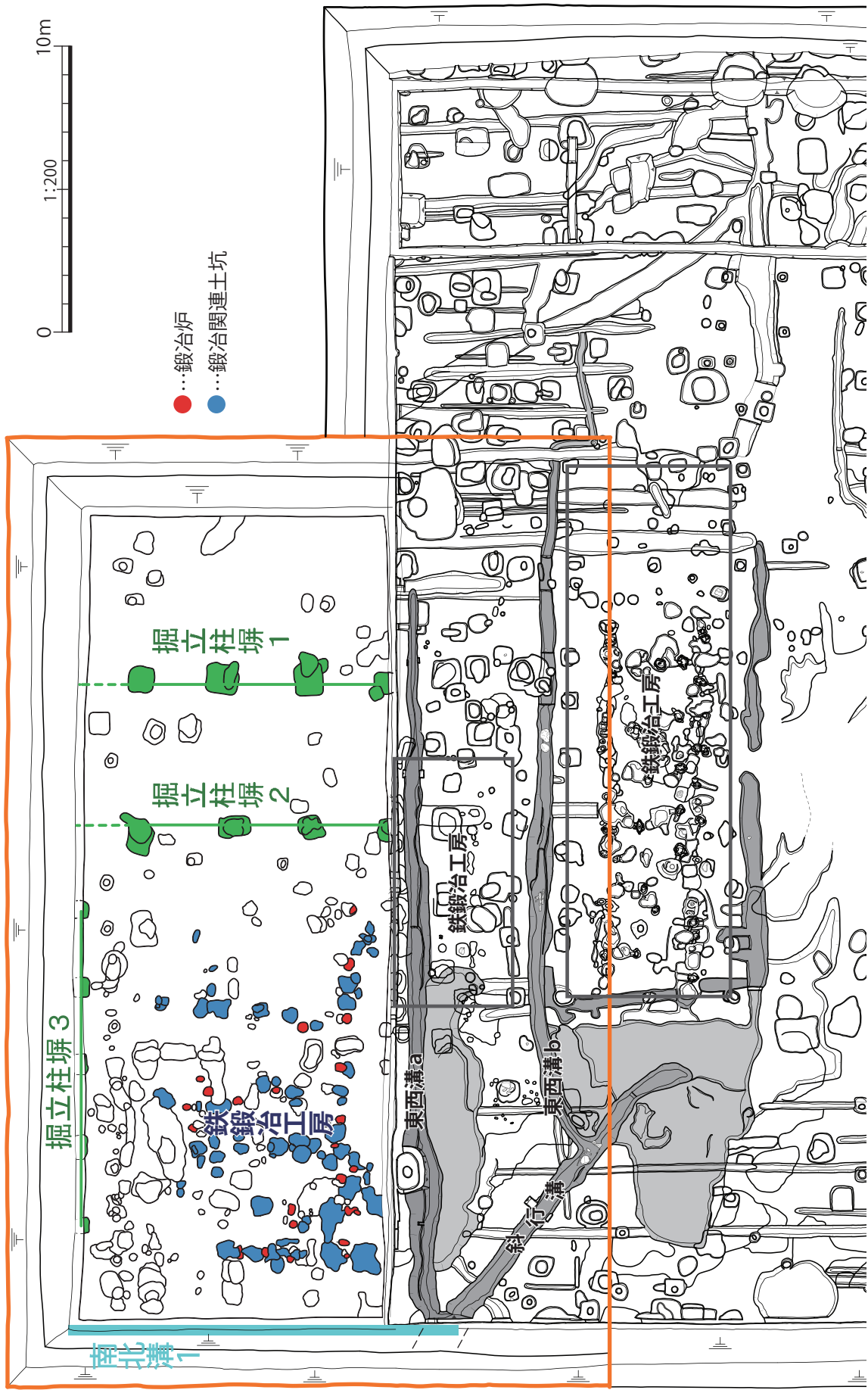


図2 今回の調査の位置

第495次調査 北調査区

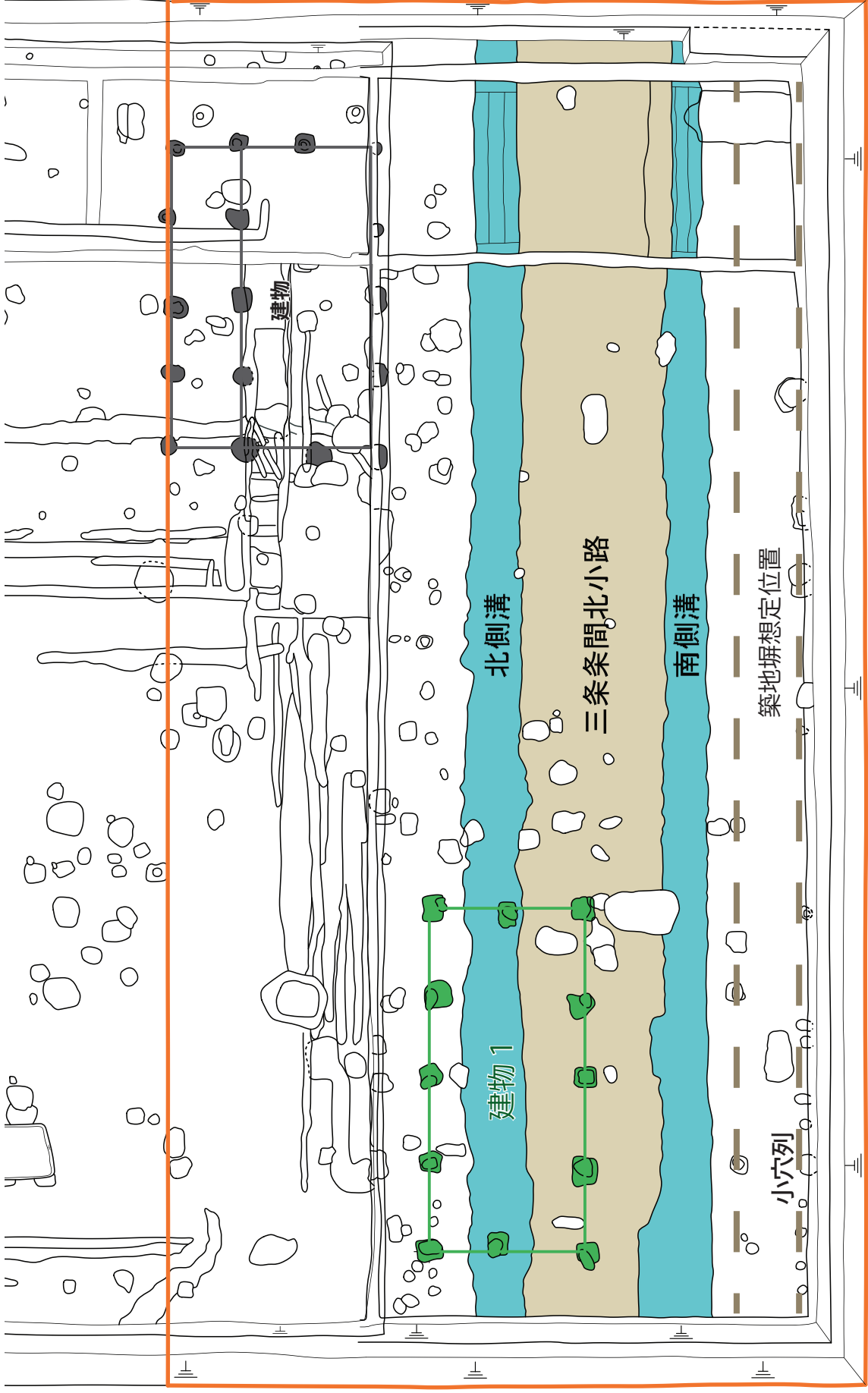


第486次 調査区

図3 北調査区遺構図 (1:200)

第491次 調査区

第478次 調査区



第495次調査 南調査区

図4 南調査区遺構図 (1:200)